

西洋建築史学に対する顕著な業績と九州の建築および

熊本アートポリスへの多大の貢献

(故) 名誉会員 堀内清治君

堀内清治君は、日本における世界的水準の西洋建築史研究の推進においてパイオニア的役割を果たすことになった顕著な学術的業績をあげたことと、九州の文化財建造物の保存および町づくりの発展に対して大きな社会的貢献を果たしたことが特筆される。

同君は、1950～60年代に、日本の本格的な海外調査としては最初の東京大学イラク・イラン遺跡調査団に毎年参加し、主要メンバーの一人として、サル・サラサートなど遺跡の発掘調査に基づいた建築研究を行い、これにより建築の誕生と都市の起源に関わる西アジア建築研究の基礎を築くと同時に、日本からの西洋建築史研究に対する基本的視座を獲得したといえる。

その後1960年に熊本大学へ赴任後は、西洋建築史研究に地中海という地域的な概念を導入し、「地中海建築」を提唱した。そして熊本大学環地中海建築調査団を自ら中心となって組織し、1970年には北アフリカ地域、1972年には中近東からギリシアにいたる地域の現地調査を行い、「地中海建築」の概念を構築し、検証した。この調査はどちらも約半年をかけた長期のもので、古代ギリシア・ローマの遺跡を中心に数千枚に及ぶ建築遺跡の写真と測量図が作成収集され、この分野の世界的な基本資料となっている。そして調査結果は「地中海建築 全三巻」として日本学術振興会から刊行され、1981年に日本建築学会賞（業績）を受賞している。

明治期における我が国の近代建築の開始にあたって、19世紀の西洋折衷主義建築様式の導入を近代化にあたっての軸としたため、西洋建築史の体系と様式（スタイル）の幅広い理解が建築史家と建築家の主要な役割となり、多くは同一人物が両方の役割を兼ねていた。したがって初期の西洋建築史研究は、哲学的・建築論的解釈による受容に比重がかかりがちであったが、やがて、日本建築史研究の方法的蓄積の上に立って、西洋建築の第一次資料に自らあたり、日本からの、外部ならではの西洋への視点を有効に提出し、地中海建築に関する世界的権威者となった先導的研究者が堀内君である。この大きな業績と存在感が同君の他の社会的活動の源泉になっている。

地域の活動としては、熊本県や熊本市の文化財専門委員とその委員長を長く務め、熊本における建築文化財の保存修復活動にも顕著なものがある。例えば赤煉瓦の熊本地方裁判所の保存運動や、明治の西洋式の港である三角西港の保存整備などに尽力した。特に日本建築学会九州支部歴史意匠委員長に在任中は、九州の建築史・意匠系研究者のリーダーとして、九州各地の建築文化財保存を通じた町づくりに大きく貢献した。

とりわけ、熊本アートポリスのアドバイザーの役割を特に顕著な貢献として挙げねばならない。これは運動自体が1993年に日本建築学会文化賞を受賞し、参加作品の多くが日本建築学会賞（作品）など内外の賞を受賞するなど、国内外の建築界での評価が高く、熊本の建築文化のみならず日本の建築界の発展に果たした役割は計り知れない。同君はアドバイザーとしてこの事業の発展を強く推進するのみならず、

ともすれば地元から遊離しやすいこの種の運動が、県民によく理解され定着するよう努力し、運動の後見人としてその発展に顕著な役割を果たした。このことは、同君の真摯かつ重厚な人柄とともに、建築史研究者としてあげた卓越した功績のなせるわざである。

よって、同君の功績に対し、ここに日本建築学会大賞を贈るものである。